

新カゾクの時代 ~ファミレス社会で おひとりさま高齢者をどう支える~

日本は今後、65歳以上の単身世帯が増え、単なる高齢化社会でなく「おひとりさま高齢社会」へとその内実が変わっていきます。「家族」の果たしている役割や機能がなくなった「ファミリーレス社会（＝ファミレス社会）」で果たして誰が、何が新しい「カゾク」となっていくのでしょうか。本誌は7月、ケアタウン総

合研究所（高室成幸代表）との共同企画としてセミナーを開催しました。ゲストはルポライターの末並俊司さんと、「ファミレス社会」という言葉の生みの親、高齢社会をよくする女性の会理事長の樋口恵子さん。お2人の講演主旨と高室さんを交えてのパネルディスカッションをダイジェストでお届けします。

講演の部

山谷は自然に生まれた 地域包括ケアシステム



末並俊司さん

1968年生、北九州市出身。雑誌記者、ルポライターとして週刊ポストなどを中心に取材、執筆。昨年上梓したノンフィクション『マイホーム山谷』（小学館）は2021年、小学館ノンフィクション大賞受賞。

私は2010年ごろから東京のドヤ街と呼ばれる山谷の取材に入り、通い続けているうちに地域の高齢化とそれを支えているケアのネットワークが見えてくるようになり、2018年から本格的に取材をして「マイホーム山谷」という本にまとめました。

最初に興味をひかれたのは、山本雅基さんという人が立ち上げた「きぼうのいえ」という民間ホスピス施設でした。いわゆる病院のホスピスではなく生活困窮者なら誰でも受け入れ、看取りも行う、ドヤ街に暮らす人にとっての終いの住処です。山谷にはこの「きぼうのいえ」のほかにも「ふるさととの会」「訪問看護ステーションコスモス」、炊き出しなど

をする労働組合など、山谷の人たちをケアするために実にさまざまな団体が活動していて、しかも外から入ってきた人たちだけでなく山谷に大昔からあるお寺やホテルなどの地域資源も、混然一体となって山谷の人たちを支えているのです。私にはそれが山谷版の地域包括ケアシステムのようなものに思えました。

そして、本を書くなかで、山谷に広がるケアシステムとは、家族の代替機能ではないかと強く感じるようになります。日雇い労働者でいろいろな理由で山谷に流れ着いて、家族とも断絶された方が多く、要するに、生来のファミリー・レスです。そういう人たちをどこから来ようとも受け入れるし、その労働者を助けるための団体も受け入れる。山谷の場合はいろいろな人たちが自然に集まってきて、自然に結びついて、自然にみんなが助けている。自然に湧いてできたような地域包括ケアシステムが成り立っていると僕は感じています。

山谷では路上に住んでいる人もドヤに住んでいる人も、そして支援者も、誰もがどこかにつながっていて、いつも誰かを気にかけています。その意味でも本当にファミリー。疑似家族になっています。

膝から孫がはみ出す時代! 直視した政策を



樋口恵子さん

1932年生、東京都出身。東京大学卒業後、時事通信社、キヤノンなどを経て評論活動へ。「高齢社会をよくする女性の会」理事長。厚生労働省社会保障審議会委員、内閣府男女共同参画会議の仕事と子育ての両立支援策に関する専門調査会会長など歴任。「人生100年時代の船出」（ミネルヴァ書房）「老いの福袋」（中央公論新社）など著書多数。

かつて日本では、高齢者にとって幸せな生活とは、親子3世代が同居して、孫を膝に抱きながら夕食のだんらんをとること、などと言われていました。ところがいま高齢化率は29%超となり世界でまぎれもなくトップの高齢国となり、家族のあり方も劇的に変わっています。

年老いた親を子どもたちの誰かが引き取り同居するという暮らし方も変わりました。少子化で子どもの数が減って親を引き取れる能力のある家族関係がほとんどなくなったことと、住み慣れた家、馴染みの関係のある地域で生きていきたいと頑張るお年寄りが増えたからです。

そして、介護保険が発足した2000年に、65歳以上の高